



～文化の風が吹くまち ちくしの～

文化薫道



◆其の六十八

ひのお

現在、私たちは緊急時での通信手段として電話やメール、サイレンなどを使用しますが、遠隔地と時間差なく有事を伝達する方法が無かった時代には、「のろし」が重要な連絡手段でした。

「のろし」は煙や火を使い、それらを目視で確認、リレーして情報を伝達する仕組みで、人が直接移動する場合に比べて格段に速く伝えることができました。

664年に、「のろし」を上げる施設として「烽(とぶひ)」を各地に設置したことが『日本書紀』に記されています。これは前年の663年に、朝鮮半島の白村江での戦いに敗れたことで、唐・新羅連合軍の日本列島への侵略が現実味を帯びる中で、軍事的な緊急連絡手段として導入されたと考えられます。「烽」があった場所が特定されることはまれですが、推定地には、「ひのお」、「ひのやま」、「ひの

くま」、「ひのみね」、など「火」を連想させる地名が多く見られる特徴があります。

古代山城

「基肆城(きいじょう)」



「日ノ尾」推定地(市内下見から筑紫駅方面を望む)

にほど近い市内原田の山上にも「日ノ尾(ひのお)」という地名が残っており、江戸時代の絵図にも同様の記載があることから古代の「烽」の名残ではないかと考えられています。

いつ来るか分からない敵に備えて「烽」を設置し、人員を配置し続けることは大変なことだったと思われませんが、当時の人々の危機意識はそれを上回るほどに強烈なもので、それ故に地名にも残ったと考えられます。

関文化財課



筑紫野市フェイスブック
<https://www.facebook.com/ChikushinoCity/>



筑紫野市ツイッター
<https://twitter.com/ChikushinoCity/>



筑紫野市LINE公式アカウント
<https://lin.ee/6X9wMoy>